

## 第4回

大島海洋国際高等学校

在り方検討委員会

平成30年3月8日

東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課

## 第4回 大島海洋国際高等学校在り方検討委員会

場所：都庁第二本庁舎31階 特別会議室25

【事務局】 それでは、開会に先立ちまして、大島海洋国際高等学校在り方検討委員会設置要綱第9条に基づき、本日の委員会は公開とさせていただきます。傍聴人の方は合計6名、報道機関の入室はございません。

それでは、定刻となりましたので、委員長、お願いいたします。

【出張委員長】 それでは、第4回の会議を開催していきたいと思っております。

非常にお忙しい中、お集まりいただきまして、まずは感謝申し上げます。ありがとうございます。また、天候も今日は少し悪くて、そういう中でございますが、4回目を始めさせていただきますしたいと思います。

始める前に、先週は、10回生ですかね。大島海洋国際高校の卒業式がありまして、私も行かせていただきまして、非常にいい式だったなと思っております。いろいろなことがありましたが、それを乗り越えて、78名の子が卒業していったということで。次のステップで、彼らがまた活躍してもらえればなという思いで、非常に静粛ないい式だったなと思っております。冒頭でございますが、少し御紹介させていただきました。

それでは、前回の議論をちょっと振り返りますと、大島海洋国際高校の教育理念、それから教育目標を決定させていただきました。その後、生徒のキャリア像について、基づく教育の方向性や、学校の基本的な枠組みなどについて、皆様から御意見を頂戴したところでございます。教育の方向性については、四つのキャリア像ごとの教育内容、それから系統的にするための作業部会で議論を深めてほしいという御意見を頂きました。

また、国際的視野に立った教育に関する内容も、もう少し整理するべきではないか、学校の基本的な枠組みに関しましては、高大連携の視点も含めて検討するべきではないかといった御意見なども頂いたところであります。

そこで、本日は、前回の議論に対しまして、作業部会で改めて検討した内容について、皆様に御確認いただきまして、その後、御議論を頂きたいと思っております。

また、最後には、報告書の骨子についても、御確認を頂ければと思っているところでございます。

本日の第4回目のこの検討委員会が、実質的には最後の御議論の場になると思っておりますので、

どうぞ皆様の御見地から、多くの意見を賜れればと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひします。

なお、前回、第3回の議事録につきましては、事務局から各委員の皆様へ、内容の確認をしていただいた上、既にホームページ上で公表されておりますので、この場にもって、御報告をさせていただきます。

それでは、まず、事務局から、お手元の資料の内容について、説明をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

**【事務局】** 配布資料について、説明させていただきます。

検討委員会第4回次第がA4縦1枚でございます。

続きまして、次第の中段以下配布資料一覧にございますとおり、資料1-1「生徒のキャリア像に基づく教育の方向性等（案）における前回検討委員会からの変更点」が、A4縦1枚でございます。

続きまして、資料1-2「生徒のキャリア像に基づく教育の方向性等（案）」がA3横1枚でございます。

資料1-3「大島海洋国際高等学校在り方検討委員会【改革のポイント】」がA3横1枚でございます。

資料2「学校の基本的な枠組みや引き続き検討が必要な事項（案）」がA3横1枚でございます。

資料3「大島海洋国際高等学校在り方検討委員会報告書（骨子）案」がA3横1枚で、最後に新聞記事の抜き刷りでございますけれども、丹羽委員の方から御紹介いただきまして、別途配布させていただきました。

説明は以上でございます。

**【出張委員長】** それでは、次第に沿いまして始めたいと思いますが、次第の2、議事（1）育成すべき生徒のキャリア像と教育の方向性について、事務局から資料の1-1、資料の1-2、及び資料の1-3を用いて、説明をお願いします。

**【事務局】** 議事に関する資料の御説明をさせていただきます。

資料1-1でございます。「生徒のキャリア像に基づく教育の方向性等（案）における前回検討委員会からの変更点」を御覧ください。

左の列から、前回検討委員会での委員の皆様のお議論の概要。真ん中に、それを受けまし

て検討いたしました作業部会での検討の概要。一番右に、資料への反映個所を記載しております。

資料1-1にて、ごくごく簡単に検討してきた内容を御説明差し上げた上で、資料1-2、資料1-3にて、具体的に御説明いたします。

資料1-1の表の上段を御覧ください。前回の御議論で、四つの小学科案を2学級でどのように考えるのかという御意見を頂きまして、四つの分類を再構成いたしまして、大きく二つの分類に整理しております。

なお、前回四つの小学科案としておりましたが、小学科としていく方向性については変わりございませんけれども、そうするかどうかも含めて、引き続き検討していくこととさせていただきます。

その次の欄を御覧ください。「海洋創造系という名称が中学生にわかりにくいのではないか」との御議論を頂きました。これに関しましては、海洋鉱物資源開発等のいまだ産業となっていないもの、それからこれからの海洋政策などを深く学んでいく学習分野であることなどの観点から、海洋の未来を創造する分野という意味を込めまして、海洋創造系という名称が良いのではないかという議論としております。再度、海洋創造系にて御提案させていただきます。

一方で、その他の案として、委員の皆様からも御意見いただきましたとおり、二つの案を併記しておりますので、後ほど、分類や名称につきまして、委員の皆様にご議論をお願いしたいと存じております。

その次の欄を御覧ください。教育の方向性について、ばらばらとした部分もありまして、もう少し作業部会で議論すべきとの御意見を頂きました。これを受けまして、作業部会にて、教育の方向性を全ての教育に共通する内容と、四つのキャリア像ごとの内容に整理した上で、内容を再検討し、記載してございます。

その次の欄を御覧ください。国際的な教育に関する内容を整理すべきとの御意見を受けまして、こちらも考え方を整理し、内容を1-2にて記載させていただきました。

その次の欄を御覧ください。目指す資格等について、もう少し具体を検討すべきとの御意見を頂きました。特に海洋創造系を中心に整理して記載してございます。後ほど、御説明をさせていただきます。

一番下の欄を御覧ください。「現在の学校と、本委員会での議論による改革後の学校像が

どう変更となるのかわかりやすくすべき」との御意見を頂きました。こちらについては内容をわかりやすく説明できるよう、別途資料1-3を作成しております。

それでは、資料1-2を御覧ください。変更点について御説明させていただきます。

先ほど申し上げましたとおり、一番左の欄にて、前回委員会で四つのキャリア像に基づき、小学科を想定した四つの分類としておりましたけれども、そのうち、船舶運航技術と海洋生物、海洋産業につきましては、海洋産業・海洋科学系としてまとめてございます。これによりまして、分類を大きく二つにしております。

なお、作業部会の議論の中で、「海洋生物系では生物の生態調査や研究などを行うため、一概には海洋産業とは言えないのではないか」といった議論もありました。海洋生物については、海洋創造と併せた分類とすべきではないかとの考え方もそうした中でございました。そうした考え方も踏まえまして、船舶・生物・産業の三つをまとめる際には、単に海洋産業系とするのではなく、海洋産業・海洋科学系という名称としたところでございます。

また、先ほど御説明させていただきましたとおり、海洋創造系では、その他の案として、海洋研究系、海洋探究系の二つの案も併記させていただいております。

続いて、左から3列目の教育の方向性欄を御覧ください。四つのキャリア像に共通した項目を整理いたしまして、総論として学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた内容を、一番上の丸にて総論で記載しております。

続いて、二つ目の丸で、「校内での学び」。三つ目の丸で「ドミトリでの学び」。四つ目の丸で「外部の教育力の活用」。最後に学校教育を支える「教員の育成」と分けて記載しております。

また、国際的な教育についてですが、二つ目の丸の校内での学びの欄の七ポツ目に総論として、国際的な教育について記載をした上で、その具体的な手段の例といたしまして、上から四つ目の丸の外部の教育力の活用欄におきまして、Tokyo Global Gatewayの活用や、世界ともだちプロジェクトの活用、JICAとの連携、大島海洋国際版TEEP（東京イングリッシュ・エンパワーメント・プロジェクト）の活用などについて検討していくことを記載しております。

また、その右の欄には、四つのキャリア像ごとに行う教育活動をそれぞれに学年別に整理いたしまして、特徴的な教育活動と目指す資格を含めて記載しております。

船舶・生物・産業については、大きな変更等はございませんが、一番下の海洋創造系につ

いては、特徴的な教育活動にて、四つ目の丸い項に、全国海洋教育サミットでの研究発表、学会への論文投稿などを追加しております。

また、目指す資格において、英検2級程度の取得を、将来的に目指すものとして教育免許や学芸員の資格をそれぞれ記載してございます。

なお、英検につきましては、学校全体で目指すべきものであるとの意見もありましたが、ことさら海洋創造系で取得を目指すという意味から、海洋創造系のみに記載しております。

この辺りの考え方につきましても、委員の皆様にご議論をお願いしたく存じます。

続いて、資料1-3を御覧ください。現在の学校と検討中の内容をわかりやすく整理した資料となっています。左側に現在の学校、真ん中に改革の必要性、右に検討中の内容を記載しています。これまで御議論いただきました内容ですので、詳細な説明は割愛させていただきますが、左側にあります現在の学校では、海洋を通じて国際社会に貢献できる人材を育成するため、国際科という学科の枠組みで海洋を学びながら、国際人を育成しているということでございます。

一方、真ん中の欄、上段にありますとおり、破線の部分を御覧ください。生徒・保護者の興味やニーズが海洋にあるという現状、またその下の波線の部分、海洋人材の育成に関する国家的要請の増大があること。さらには、その下の波線の部分です。離島振興に対する都民の期待の状況から、一番右に記載の現在検討中の改革の方向として、新たに理念を再構築いたしまして、具体的な七つの教育目標の下に、学科を水産に改変した上で、国際社会で活躍する海洋人材を育成するということを目的として掲げまして、各キャリア像に応じた専門的な学びを実践する学校に改革していくという内容を記載してあります。

長くなりましたが、説明は以上でございます。

【出張委員長】ただいま事務局の方から、資料の1、資料の1-2、資料の1-3について、説明をしてもらいました。前回の検討委員会が終わった後、作業部会をやりまして、その中で検討された生徒のキャリア像と、教育の方向性、そして現在の学校と検討中の学校像の変更内容等について、説明をしてもらいました。

本日は、まずこのキャリア像と教育の方向性等について、御意見や御質問等を頂きたいと思っております。かなり細かく、資料の1-2は細かくて恐縮なのですが、御意見を頂戴できればと思っております。

前回の御議論を受けて、作業部会でかなりもんでいただいて、直してきてもらっているか

なという気がするのですけれども、名称のところは少し御意見を頂きたいというのも出ておりましたし。

【丹羽委員】今日資料を配らせていただいたのですが、これは一昨日の日経新聞に海洋教育、小中の指導要領に海洋教育ということで、今全国で海洋教育というのが徐々に実施されているようになってきています。海に興味を持っている小学生、中学生や、将来海の仕事に就きたいという小学生、中学生がこれからどんどん増えてくるということが期待されるわけなのですが、そういう生徒たちの期待に沿うような大島海洋国際高校であってほしいなというように思っておりまして、今回の改革というのは、まさにそういうようなところに、期待に沿えるようなものになっているなというように強く思います。

そういった観点からも、大島海洋国際の改革は非常に重要ですし、全国の海洋系の高校のモデルにもなり得る取組なのではないかなというように思います。

あと、高大連携を進めていくということも、海洋系だけではなくて、全国の高校のモデルに、非常に貴重な取組になるというように期待がされるわけなのですが、そういうときに、是非大島海洋国際の改革を成功させてもらいたいというのが、私の個人的な意見なんですけれども、成功するためには、やはり教員とかスタッフの充実というのは必ず必要になると思うんです。まずは、今回海洋系の専門的な海洋教育の充実ということで、まず一つは海洋のことを専門的に深い知識を持っている、海洋系の教員、スタッフですね。例えば、今回船舶運航技術というのがあります。これは、例えば航海士の免許を持った教員がいるというようなことだと思いますし、例えば、海洋産業だったら、ROV（自走式水中テレビ装置）とかそういうものを操作ができる、そういうような教員がいるといいのではないかなと思います。

もちろん、そういう教員はかなり専門性を持った教員なので、なかなかすぐには見つからないかもしれないですけども、そういう場合には、大学だったりとか、JAMSTEC（海洋研究開発機構）だったりとか、あと産業界だったりとか、そういう外部の機関から、外部講師という形で、柔軟に採用できるような仕組みをつくったら、非常にありがたいなと思います。

あと、もう一つは、今回の海洋創造系などは特にそうなのですが、課題研究をここでも中心にやっていくということで、あと、外部からの講師というのは既に先ほど資料2の方に書いてありましたけれども、こういうときに、やはり外部との橋渡しもできる専任の人がいると、外からも非常に窓口が一本化されて、コンタクトしやすいですし、非常にそういう人が

いるとありがたいなというように思います。

是非、そういうようなコーディネーター役をしてくれるスタッフも増やしていただけるとありがたいと思います。

あと、課題研究などを進めるときには、課題研究の仕方だとか、課題研究を学会などで発表するときには、発表の仕方とか、スキルとか、そういうものも教えてもらえるような、そういうような先生が専任でいると非常にありがたいと思います。

あと、地元と協調をするときも、そういうコーディネーター役は、必ず必要になってくるのではないかと思います。

あと、もちろん、外部講師も私たち大学とか、産業界とか本当に積極的に協力したいと思っている人も多いと思いますので、例えば、東京大学だったら海洋アライアンスの出前授業だとか、海洋学会だったら講師派遣事業とか、そういうような仕組みもありますので、そういう仕組みも積極的に活用して、できるだけ現場の先生方に負担が余りにも増えないような形で、是非この改革を成功させていただきたいなというように、個人的には思っています。

【出張委員長】 どうもありがとうございました。貴重な御意見を頂きました。この後の資料の2のところの「教職員等の確保・育成」のところにも関係してくるのかと思います。いいものにしていくために、いろんな手立てをしていってもらいたいということで、貴重な御意見をありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。名前とか名称はどうですかね。事務局からも少し出ていたのですが。

【丹羽委員】 私は、海洋創造系というのは、いい名前だなと思っています。

【出張委員長】 ほかにどうでしょうか。

では、増渕部長。

【増渕委員】 私は、分類のところの海洋産業・海洋科学と海洋創造となったときに、中学生がわかるかなというのはやはり気になって、中学校段階でなかなか海洋のことを学ぶという時間も多くない中で、わかりやすさというのが必要ではないかなというように思います。海洋創造系のところのキャリア像を見ると、海洋政策であったり、若しくは、四つの目の丸のところですかね。文化や伝統、海との関わり、海とか人間とか文化とか、そこから広がっていくとなったときに、創造というところも、これから新たにというように見えてくるのですが、そればかりではなくて、今までの人間と海との関係とか営みとかを考えると、ここに例



示的にありますけれども、海洋探究という方が、イメージがぴったりするのかなと思いました。感想ですけれども、少しそのように思いました。

それから、国際的なところですが、日本人にとって、海って必ずそこから外は外国ですし、海洋をやるということは、必ず外国との様々な関わりをやっていくわけですから、そういった中では、全てこの分類の中で関わってくるのは、国際に関係するのだろうなというように思うので、そういった辺りはうまくちりばめられているのかなという感じはしました。

私の方からは以上です。

【出張委員長】ありがとうございました。下のほうの海洋創造系のところ、海洋探究もどうかかなという意見も出ております。

【丹羽委員】海洋研究という言葉が入ってしまうと、前の海洋産業・海洋科学と少し区別がつきにくくなるかなという感じはします。

【増渕委員】募集の段階は、何か分けるんですか。それとも、一括で募集するんですか。

【事務局】よろしいですか。

【出張委員長】どうぞ、事務局、お願いします。

【事務局】募集の段階を踏まえると、考え方としては、今、都教委の募集のやり方でいくと、学級単位で募集をしているのが、現在の都立高校の募集のやり方ですので、それを踏まえると、海洋産業・海洋科学系、海洋創造系という二つの分類で募集をすることになる可能性がございます。

従って、その辺りの人数バランスも踏まえて、考えていかなければいけないのかなということも、検討すべき事項としては考えられます。

【出張委員長】今のところも、この後資料の2の方で、今後、学校の基本的枠組みや引き続き検討が必要な事項の方に入る可能性があるんですかね。

【事務局】はい。

【出張委員長】どういうふうに分けるか。系列でやるのか、学科でいくのか、いろんなことを教育庁として考えなければいけない。今後の話になると思うのですが。

【事務局】よろしいでしょうか。先ほど資料の御説明でもさせていただきましたとおり、船舶運航技術と海洋産業、それから海洋生物と、仮ですけれども海洋創造系という考え方もございました。名称もさることながら、分類の仕方とか、そういうところも御意見を頂戴でき

ればというふうに思います。

【出張委員長】 どうですかね。

【事務局】 それも含めて引き続き検討した方がよいという結論であれば、報告書の方にはそういう記載をさせていただきたいと思っています。

【出張委員長】 山寺委員、お願いします。

【山寺委員】 海洋産業・海洋科学系と、それから海洋創造系の二つなのですが、この分類については、私としましては、一旦、これはこれでいいと思います。作業部会でもこういう方向性で、先ほど検討の経緯についての説明もありましたけれども、それで具体的に、この後、この二つの系列でどういうふうに分けていくかというところまで踏み込んだ検討をしていく必要が今後あると思いますので、事務局が言ってくださったように、今後検討していく必要性があれば、引き続き検討していきたいなと思っています。

【出張委員長】 ありがとうございます。正式に、入学者選抜のところで示すに当たって、更に検討しなければいけないのではないかなという意見ですが、今の段階でも、少しここはこうの方がいいのではないかとあれば、出していただけると助かるのですが。どうですか。

【初宿副委員長】 山寺先生に実態の話で少しお伺いしたいのですが、私たち大人が見たときのこの分類って、字面のとおり理解ができるんですけども、中学3年生が受験をするとき、あるいは高校1年生の子供たちが、この名称を見て、自分の進路を具体的にイメージできるだろうかという部分です。例えば、入るときは二つの学科一緒に、その中で、第1希望、第2希望、第3希望に応じて分けていく方法もあるだろうなど。それが今確か2年生のときに分けていらっしゃるよね。ああいう方法もある。それは入るときイメージと、実際入って、学校で学び、それから寮生活していく中で、自分の適正に気が付いていく。そのときに進路変更ができる要素も残してあげる。言い方を換えれば、中退をなくしていく。そのような視点からも考えなければいけないと思うのですが、今、山寺先生が校長をされている学校の実態において、入り口の段階から明確に二つに分けていく。そういうのはどのようにお考えになられますか。

【山寺委員】 現在は海洋系と国際系、入学した後の2年生の段階で分けていますが、それはそれで入学してから、自分の行きたい方向を定めるので、大きなメリットがそこにはあると思っています。

したがって、初宿委員がおっしゃったとおり、中学生が最初から分かれて入ってくると、

ミスマッチのリスクはあろうかと思います。そのため、入ってきたところで入れ替えができるような仕組みを整えておくのか、というのは、今後十分検討していかなければならないことだと認識しています。

【初宿副委員長】ありがとうございます。

【出張委員長】ほかにいかがでしょうか。

田島委員、保護者の観点からいかがでしょうか。

【田島委員】今、お話しされたクラス分けのところが、どうしてもどうなのかなど。最初から四つに分けて入れた方がいいのか、それともこの二つにした方がいいのか。それとも、今のように入生は皆同じことをまずやって、2年生で選ばせる。どれがいいのだろうかと、それがすごく悩みどころですね。

【出張委員長】なるほど。ここら辺は少し詰めていかなければいけないところかなと思うんですけれどもね。

【山寺委員】年によって、若干のばらつきがあるのですが、今も国際系と海洋系ということで、きれいに分かれてくれればいいのですが、きれいに分かれないうときですね。つまり海洋系の生徒が多い年もあれば、ときには国際系の希望が多い年もある。そうすると、自分が行きたいところに入れなくて、別の方に振り分けられてしまうというデメリットも、現在はあって、これが入学する前だったら、ある程度心積もりして入学してくるというメリットはあるかと思いますが、入学してから、自分は海洋系に行きたかったのに国際系に回されたとか、逆に国際系に行きたかったけれども海洋系に回されたというときの、生徒たちの気持ちは、少しモチベーションが下がってしまう。そういう意味では一長一短なので、もう少し議論したいと思います。

【出張委員長】議論しないといけないですね。それで関係すると、例えば資料の1-3。先程整理をしてもらっているのですが、これ現在の学校が左側。検討中の学校像が右側になっていて、今の山寺委員が言われているところで、右側を見ると、確かに系列は二つになっていますよね。海洋産業・海洋科学系、それとその下に海洋創造系となっています。でも、今、同じようなことが起こるのではないですか、この海洋産業系の方は。その後、技術に行ったり、生物に行ったり、産業になると。

【山寺委員】ここも同じことが起こります。

【出張委員長】同じことが起こりますよね。だから、その辺も総合的にどうしていったらいい

いかということを考えていく必要があるのかもしれないですね。

それと、海洋産業系の1年次の学習内容のところに、産業と科学は入っていますよね。基礎航海と入っているでしょう。これは、創造系でもやるのではないですか。ここも何か私、分けているのかなと思ったのですが、何か山寺委員ありますか、これに対して。

【山寺委員】海洋創造系の方に、この基礎航海など、基本的な海洋に関する実習はやった方がいいと思います。

【出張委員長】そうですね。どちらがいいか、今後更に深めていかないと、今の左側のような1年生のところは、共通的に学んで、2、3年で分かれていくのか、その辺は今後の、実際につくっていくところで、決めていく形になるんですかね。今、ここでこれだというのがないような感じがします。

【事務局】よろしいでしょうか。少し議論の経過だけ御説明させていただきますと、この三つのくくりをするのは、先ほど言ったとおり、海洋産業に関する部分だということで三つにくったわけですが、現場で実際に生徒に教えている先生たちの意見としては、やはり意識をしっかりとって入学してきてほしいという観点から四つに分けたのが最初の前回での議論というわけです。一方で、カリキュラムを具体的に頭の中で想像してみると、1年次については普通科目を中心に学習せざるを得ないと思いますから、そうすると、実際に海洋系の授業ができるのは、海洋基礎科目である水産海洋基礎になるとすると、カリキュラム上の教育の特徴は見えにくい。

一方で、水産海洋基礎の中身については、それぞれの類型で学ぶ分野を違えることはできるのではないかと、というようなこともあろうかと思えます。

したがって、先ほど委員長が言われたように、1年次を全部まとめてしまうことで、実際カリキュラムをつくってみたら、そういうふうに見えるという可能性がないことはないかなという気はしますが、いかがでしょうか。

【山寺委員】理想的な話と実際問題、今事務局が言ったカリキュラムをイメージしながらということになると、少し限定がかかってしまうと思うんですね。もう少し言いますと、水産海洋基礎を1年生のときに全員にやらせる、どの系列に行ってもやらせるといったときに、何単位で行うのかということと、どの程度やるのかという話になってくると、先ほど冒頭で話があった、教員の充実という話になってきまして、かつて大島南時代は1クラスだったので、現有の教員数でやれていたのですが、2クラスになって、同じようなことをやるとなる

と、持ち時数の関係が出てきてしまいます。そこは、今後、作業部会を含めた中で検討していかないと、全部にやるというふうに方向性定めてしまって、実際はめようと思っただけはまらなくなってしまうということも、可能性としてはあろうかなというように思っています。

【出張委員長】したがって、更に検討が必要な事項の中に残すなりするのがいいのかなと思いますけれども。

ただ、とにかく中学生やその保護者にわかりやすい形にしてあげるのが一番だと思うので、お客様目線といった、学校の都合ではない形で示していくのがいいと、私は思っています。中学生の子が行きたいなと思って来て、そこで自己実現してもらいたいので。そういう観点で、少し今後も、検討していく事項として残してもらえればと思います。

ほかにどうですか。何回か議論をしてきたところで、内容面などもかなり、ここでのいろいろな内容を入れていっているのです。どちらかというところ、名前がこれでいいのかというところで。

方向性は大体いいですかね、これで。名称などは、先ほど創造がいいという方もいれば、海洋研究は少し違うのではないかと、海洋探究というのもありではないかといった辺りも、この辺も少し検討して決めてしまいますか、ここで。

【事務局】総論まとめれば、どこかでいきますけれども。

【出張委員長】そうですね。事務局としたら、まとめてもらった方がいいですよ。

【事務局】はい。

【出張委員長】先程創造系と海洋探究どちらも出ていたんですけども、山寺委員、何かどうぞ。

【山寺委員】作業部会には、私自身も出ていますので、この名称的には中に入ってしまった私としては、よくわかるので、逆に田島委員とか、保護者目線で、海洋創造というところ、わかるかなというのを伺いたいところではあります。

【田島委員】確かに、前回も話をしたと思うんですけども、多分、中学生の保護者が、海洋創造系って言われても何をやるのってなるかだと思います。

【山寺委員】上の三つは何となくわかると思います。少し海洋産業が引っ掛かるかもしれませんが。

【出張委員長】そうなんですよね。

今度の学習指導要領の改訂では、探究活動が入ってくるので、小学校、中学校もアクティ

ブラーニング的なことが入るので、イメージ的には、中学生なども、探究ってこういうのだなというイメージができるようになっていくかもしれないけれどもね。創造とどちらがいいですかね。その辺、何か御意見ありますかね。なかなか名前は難しいですね。

【初宿副委員長】誰かが言わなければいけないと思って。今の話を総合すると、今後のことも含めて海洋探究系という仮称で置かせていただいて、今後詰めて行くのがいいのかなと考えます。

【出張委員長】探究系でね。丹羽委員、それでどうでしょうかね。いいですか。

【丹羽委員】はい。

【出張委員長】探究系という形で詰めを更にもらえますかね。

【事務局】はい。

【出張委員長】ほかにどうですか。名前はいいですか、これで。

委員長が余り言っただけなんですけれども、私的には、この海洋産業・海洋科学系でしょう。小分類を見ていくと、最後にまた海洋産業と入っているんですよね。何かここが、大きくくりで海洋産業も入っていて、何か違う文言ができないかなと思うんですけれども。

【丹羽委員】海洋科学技術とか、そんな感じですかね。

【出張委員長】海洋科学技術系とかですね。どうですかね。山寺委員。

【山寺委員】科学技術であれば、網羅しますよね。

【出張委員長】そうしてあげた方が、桁が上になっていて、いいかもしれないですね。ここだけは訂正して「海洋科学技術系」。それと下が「海洋探究系」という大きな系列にして、まとめさせてもらっていいですか。

【事務局】ありがとうございます。

そうしましたら、名称について、分類については、今頂いた名称を入れさせていただきたいと思います。

一方で、先ほども少し触れさせていただきましたけれども、名称、分類のところはまだできていないので、アピールの仕方とか、今後学校づくりを進めていく中においては、学校案内等で生徒を集めていく、中学生を集めていくときに、この周知を図るようなことも少し、生徒目線という委員長からの御発言もありましたので、その辺りも少し報告書の方では記載をしていきたいなというふうに思います。

【出張委員長】よろしく申し上げます。

では、よろしいですかね。(1)を今やっていたのですが、資料1から1-1、1-2、1-3は続いて見ました。今、委員の皆様から出た、御提案とか御意見を取り入れまして、事務局で報告書の方にまとめ上げてもらいたいと思いますので、どうぞよろしく願います。

それでは、議事を進めさせていただきたいと思いますが、次は、次第の2の(2)「学校の基本的な枠組みなどについて」ということで、お話をしていければと思いますが、前回の検討委員会でも御意見を頂いたところでございます。こちらについても、作業部会の方で改めて検討してもらっています。まずは作業部会での検討内容について、事務局の方から説明をお願いできればと思います。

【事務局】では、資料2を御覧ください。前回、第3回の検討委員会におきまして、学校の基本的枠組みや引き続き検討が必要な事項について、作業部会で検討中の内容をごくごく簡単に御説明させていただき、また御議論を頂きました。特に高大連携の視点などが欠けているところがあるとの御指摘を頂戴いたしましたので、そうした観点に基づきまして、作業部会にて議論をいたしました。

上段の「学校の基本的な枠組みの最終案」を御覧ください。設置場所についてですけれども、今後の教育を実践するに当たりまして、どのような場所に、どのような教育環境を整備すべきかを検討する必要があるかと思います。まずは、引き続き検討する教育内容の詳細を考えながら、学校の全体のランドデザインを示していく必要があるとの記載に変更させていただいております。

学校の規模欄については変更してございません。

学校名、学科名については、今回議論を頂いたところでございますので、その内容に反映をしていきたいと思えます。

改変予定年度についてですが、ここは記載の変更、考え方の変更等はございません。

その下の欄、「引き続き検討が必要な事項の最終案」のところですが、まずは、前回御説明した6項目ですけれども、これに加えまして、委員から御指摘のあった高大連携や、関係機関との連携といった観点、それから国際的な視点に立った教育の観点を追加いたしまして、さらにそもそも論といたしまして、教育内容やカリキュラムを検討する必要がありますので、これを追加させていただきました。

また、先ほど御説明させていただきました教育に必要となる環境整備についても、教育内

容を合わせた学校のグランドデザインとして検討する必要があるということを、改めて記載をさせていただいたところです。

これら検討すべき10の項目を整理した考え方についてですけれども、まずは、やはり学校の教育内容を第1に検討する必要があるという観点から、1番目に教育内容や教育課程の欄を記載いたしました。

また、その次に、具体的な内容としまして、実習船を活用した実習や、国際的な視点に立った教育というものがあるという考え方で、2番目、3番目に記載を上げております。

また、そうした教育の成果を進路実現につなげるための指導を4番目。それらを高次元で達成するために必要な高大連携、あるいは関係機関との連携といった内容を5番目。これらの教育活動を第2の学校の間として実施する寄宿舎教育について6番目。高校での教育を実践するために、どういった生徒を募集するのかといった考え方について、入学者選抜を7番目。こうした教育の全てを検討実施していく教職員等のスタッフの確保・育成を8番目に上げております。一番下のところで、教育において実施していくべき地域振興、島嶼振興を9番目。こうした教育活動のグランドデザインを実現するための教育環境整備を10番目といった考え方で記載してございます。

それぞれに今後検討していくに当たっての視点を作業部会で議論し、記載するにとどめまして、ここではその視点や方向性につきまして、今後検討していくに当たって、こうしたことに注意すべきであるといった視点や、さらにこういうことも追加すべきだというような観点など、委員の皆様にも専門的な御見識に基づきまして、御議論いただきたいと思っております。

また、10の項目としておりますが、これ以外の項目でも、今後引き続き検討すべきであるというようなことがありましたら、ここで取りまとめをさせていただきたいと思っております。

説明は以上でございます。

**【出張委員長】**今、資料2に基づきまして、学校の基本的な枠組みや引き続き検討が必要な事項（案）について説明がありました。

ちょっと二つあるようなので、まず、上段にある「学校の基本的な枠組みの最終案」について、このまとめでいいかどうか確認をしていきたいと思っております。

ここのところについて、何か御意見、御質問がありましたらお願いしたいと思います。設置場所、学校規模、学校名・学科、改変予定年度という形で、基本的なことを書いているわけでございます。



大丈夫ですかね。ここは。今までも話をしてきたところなので。

田島委員、何かございますか。確認とかあれば。

【田島委員】設置場所のところで、各種実習施設のあり方や宿舎のあり方などを含めた改装・改修時の将来的なグランドデザインというところですけども、2020年からやるという形ですが、今、2018年ということもあり、時間的に間に合うところと間に合わないところもあるのかなと思うんですけども、その辺りをどのように考えているのかなと。

【事務局】今、現時点で全ての項目を想定したものはできないわけですけども、実践していくに当たって、現在の学校の施設で足りない部分については、地元の漁協や関連施設等の協力をお願いをしていくことで、できる限りの教育を実践していきたいというふうには考えています。

校長先生、何か補完があれば。

【山寺委員】地元の漁協とのやりとりは、少し始めてはいるのですが、まだ具体化はしていません。ただ、この2020年に書かれているものを、全て学校の施設でということは間に合いませんので、関係機関と協力して連携しながら、借りられるものを借りたりとかというような形で進めざるを得ないかなとは思っています。

【出張委員長】将来的なグランドデザインという形になっていますので、ドミトリなどの方もかなり古くなってきていますし、それがすぐ建て直せるかということ、財政的なこともあるので、でも、方向性としてはそういうことをデザインしていくよということを、この報告書に残していくことだと思うんですね。書かれているということが、大事になってきますので、すぐに全部できるのかと不安に思われるかもしれませんが、項目に入れている。そんな感じですよ。校長先生の思いも。

よろしいですかね。ほかにいかがですか。

では、この学校の基本的な枠組みの最終案はこの形で行くということにさせていただければと思います。

それでは、その後の引き続き検討が必要な事項の最終案という形で、これは今後も更に具体的にしていくための作業部会等、来年度以降も検討していく。前回6項目だったんですけども、さらに作業部会の方で精査して、10項目に増やしてきたわけですが、この辺について、こういう観点を注意した方がいいのではないかとか、10ではなくて、もう1個あるでしょうか。先ほど丹羽委員からありました、コーディネーターのこととか、もう少

し教職員の確保・育成などに加えた方がいいのではないかと、いろいろな意見を頂戴できればと思います。

【初宿副委員長】今後の検討の参考ということで、丹羽委員にお聞きしたいんですけども、冒頭、丹羽委員の方から、例えばコーディネーターの話とか、あと学術論文の話がありました。

まず、お聞きしたいのは、学術論文、これから子供たちが作り上げようとしたときに、高校生の段階で学術論文をまとめ上げるのに、高校生として何をすべきかという点で、少しアドバイスを頂けると、できるものできないものがあると思うんですけども、その辺の御意見を頂けると。

【丹羽委員】まず、学術論文、論文等にまとめるときに、一番大事なのはテーマですね。まとめられるテーマを選ばないとだめなので、そこはきちんと生徒が好き勝手にテーマを選んでやってしまうと、恐らく何もまとまらずに発散して終わってしまうので、最初の時点で、先生からここに絞れと。学生って興味が広いので、どんどん広がってしまうんですけども、そこはあえてそこを絞れときちんと指導できる、テーマ選びから指導できる教員がまず必要だと思いますね。

あと、それをまとめるときには、まずまとめた上で、いきなり論文というのは結構ハードルが高いので、それから例えば学会の発表。あるいはまず校内での発表、学会の発表という段階を経て、最終的には論文の形でまとまるので、その各時点で適切な指導ができる教員が必要です。

発表のときには、パワーポイントのスライドの作り方とか、発表の仕方とか、ということから丁寧に指導できる人がいるといいですね。

【初宿副委員長】そういう先生が必要だということですが、高校ですと教員免許を持った、各教科の先生がいらっしゃる。そういう実態の中で、今、丹羽委員がお考えになる、こういう教科、あるいはこういう先生が指導に当たるといいよとか、何かアイデアを頂けるとありがたいんですけども、いかがでしょうか。

【丹羽委員】具体的にこの教科の先生というのは少し難しいですけども、やはり大学でそういう経験をきちんと積んだ人。大学で研究をやって、理想的には論文まで仕上げてきたような経験を持っている教員がいると、そういう指導がしやすいと。

技術的なことは、生徒がどんどん学んでいくと思うので、そこはそんなに必要ないと思う

んですけども、あと英語で発表をするときにはやはり英語の教員が必ず必要だと思います。

【出張委員長】よろしいですか。

【増渕委員】関連して教えていただきたいんですけども、この学会等への論文投稿って、高校生の、水産系の高校生で、そういった事例というのは結構あるのでしょうか。

【丹羽委員】論文となると少ないですが、学会発表というのはすごくよくやられていますね。その中で優秀なものは学会ですと、高校生のセッションといわゆる一般の研究者のセッションに分かれていることが多くて、高校生のセッションは、当たり前なのですが、高校生が発表しています。

そこから更に優れたものは、一般の研究のセッションで発表するということになるので、それは数は多くないですけども、そういうことはやられております。

さらにそこから進んで論文となると、なかなか英語で論文をまとめるのは、確かに高校生だとまだ難しいところはあるかもしれないんですけども、日本語であれば十分、そういう事例も探せばあると思います。

【出張委員長】よろしいですか。ほかにいかがですか。

御承知かもしれませんが、都立高校の例ですと、小石川中等辺りではやはりそういうSSH（スーパーサイエンスハイスクール）をやっていますから、英語で論文も書いて、それもやはりスタッフは、理科の教員と英語の教員がチーム組んで指導してあげて、学会などに出す。国際学会に発表して賞などももらったりする。

それから、専門で今しているところだと多摩科学技術高校、これ工業を主体としたところですけども、英語で論文を書きながら、東大の推薦で入った子もいますので、今言われたように、スタッフの中に論文を書いた経験がある人などを、入れていくということが今後、求められて、今もいらっしゃるのかもしれないんですけども、そういうやった経験のある人がいると、可能性が高いですよ。

【増渕委員】修士課程なんか出ていると、大体やっている。

【丹羽委員】修士課程はまだ微妙なところがあって、修士課程ぐらいだと、余り論文を書かずに修士出ている人が結構います。修士論文は当然書いているんですけども、本格的な論文になると、やはり博士課程です。

【出張委員長】そうなんですよ。博士課程だと、もう1、2年次から、書いたり発表したりしますからね。

【丹羽委員】そうですね。修士課程だと学会発表まではやっている人は多いですけども、正式な論文発表という形だと、博士課程2年なので、期間も短いですし。普通は修士課程で得た成果を博士課程で論文にするということがやはり多いので。

【出張委員長】したがって、私のイメージとすると、東京の例ばかりですけども、国際バカロレアを入れている国際高校のやり方ですね。それは、本校の先生が指導しながら、どこの大学と連携するといつて、あとはその先生とメール等でやりとりして。教員は何時間以降関わってはいけないとなっているんですよ。バカロレアのやり方ですと。そういう中で、論文を仕上げていくと、さっき言った外部との連携がますます必要になってくるのかなと思うんです。

【丹羽委員】あと、高校の先生は修士課程まで出ている先生は多いと思うんですけども、先生になった後に、また博士課程に入り直して、博士を取るという先生も結構いらっしゃいますので、そういう先生方を……

【出張委員長】配置していくとかね。

【丹羽委員】はい。

【出張委員長】ほかにいかがでしょうか。質問でもどうぞ。

【初宿副委員長】丹羽委員から、冒頭、外部の橋渡し、コーディネーターで、実際、先生も東京大学の方で、いろいろな機関とやり取りをされているので、大学側から見たときに、こういう橋渡し、コーディネーターだったらやりやすいとか、こういうのありがたいなというのがあれば、少し教えていただけるとありがたいのですけれども。

【丹羽委員】むしろ余り専門性がない方がいいかなという気がします。海洋の専門性があるよりは、むしろフラットな目で、広く見られる人がいいのかなというふうに思いますね。必ずしも、海洋だけじゃなくて、むしろコーディネーターを専門にするぐらいの意識で持っていってもらった方が対応はしやすい。

海洋系だと、専門家は前に出してしまうので、そうすると専門同士で少し意見が食い違ったりとかするんですけども、そこは全く海洋が専門ではない人は自分たちの要望なども、素直にと言ったら変ですけども、聞いてもらえたりとかできると思います。それを少し橋渡しで、こっちも直接専門の人に言ってしまうと、そこで専門のことで見識の違いみたいなのがあって、衝突が起こったりとかするんですけども、そこで全くフラットな人がいると非常にいいのかなというふうに思いますね。

【初宿副委員長】ありがとうございます。

【出張委員長】よろしいですかね。

今、ここに10項目あるんですけども、8番のところが結構出ているのかなと。8番と5番ですかね。ほかにどうですかね。

【丹羽委員】8番、先程も少し言いましたけれども、外部のそういう教員とか、いわゆる教員免許を持っていないような方を講師として招くというようなことというのは難しいのでしょうか。

【出張委員長】一応、市民講師制度がありますよね。

【江藤委員】市民講師制度がありますし、その道のスペシャリストを講師として講座を持っていただいている。都立学校ではたくさん導入しています。

【出張委員長】可能であります。

【事務局】事務局からですけども、丹羽委員にお伺いしたいんですけども、島という特殊性があるので、大学さんと連携をして、例えば、海洋の授業について、2単位、3単位を大学の先生に預けてやっていただく。シラバスをつくっていただいて、講義もやっていただくとなると、授業をやるのが難しくなると思うので。

【丹羽委員】そうですね。一人の先生に頼んでしまうと、やはり定期的に大島まで行かなくてはいけないので、なかなか難しいことがあると思うんですけども、講師を何人かそろえてやるというような形でオムニバスみたいな講義をつくってもらえると、比較的やりやすいのかなと。そういう講師を派遣する仕組みは、東大だったら海洋アライアンスになりますし、そういうところから講師を1回とか2回分の授業という形で派遣して、それを何人かの先生を用意して、全員の話聞き総合的にまとめるというような、そういうような講義のデザインはできると思います。

【事務局】例えば、そういったカリキュラム、単位のシラバスをつくっていただくとかいうことも、御協力可能ですか。

【丹羽委員】もちろん。

【出張委員長】ほかにいかがですか。

どうぞ、お願いします。田島委員。

【田島委員】これからいろいろ検討課題に入っていくかと思うんですけども、多分、一番初めって、実績がないじゃないですか。こういうキャリアに進んだ人がいましたよとか、こ

ういうふうに行きましたよというのがないので、逆に、こういう教育体制で、こういう先生が直に教えますというところ。先ほどの講義のお話ではないですけども、こういうこともしていきますというところも踏まえて、今後の課題にさせていただければ。親が見る側とすれば、こんな立派な先生が来てやってくれるんだという、親としては絶対いいんじゃないという話にもなるので、是非実績がない分、そういうところで少し検討していただければと思います。

【丹羽委員】外部講師等が島まで行くことが難しければ、例えばインターネットとか、画像を通した遠隔授業みたいなものもできると、さらにそういうものがやりやすいかなと思います。

そういうのもコーディネートする教員というか、そういう形になると思います。

【出張委員長】調整能力にたけた方が必要ということですね。教科を固定せず。

どうですかね。よろしいですか。追加項目もないですかね。

【事務局】今の辺りというのは、1番、5番、8番辺りに記載をさせていただきまして、10番のところにIT環境のようなところを少し記載を入れるということでもよろしいでしょうか。

【出張委員長】山寺委員に聞いた方がいいですかね。大島の環境だと、今Wi-Fi環境になってきているんですか。島自体ですよ。学校じゃなくて。まだまだですか。

【山寺委員】なっていないんじゃないですか。

【出張委員長】なっていない。なかなか難しいんですかね。

どうぞ。

【初宿副委員長】前の仕事で。海底に高速の光ファイバーのケーブルをやって、順次、整備は終わっているかと思うんですけども。少なくとも大島は大容量の光ファイバーケーブルが。

【山寺委員】光は確かに大島には届いているのですが、その先の島にも今通るようになったがために、大島の回線の速度が遅くなって。

【初宿副委員長】それは知りませんでした。本当ですか。

【出張委員長】そうすると、少し途切れてしまうような状況もあるんですか。

【山寺委員】途切れたりというのはないですが、遅かったりはしますね。感覚論ですみません。

【出張委員長】それは教育だけではないところになってくるので、それが来ていれば、施設

設備で入れていくというのは教育庁としてはできますけれども。その辺も総合的に環境整備をしていく必要がありますね。

【山寺委員】そういう意味ではドミトリの中に、光が入るとというのは、ひとまず重要だとは思いますが。

【出張委員長】今、小池知事もICT化ということを強く言っていておられますので、実現に向けて、その辺も大島海洋国際にも入っていけるようにしていくといいのではないかと、ということできればと思います。

ほかにいかがですか。

【丹羽委員】あと寄宿舎の教育に関してですけれども、三重県の桜丘高校。

【出張委員長】行ってきました。

【丹羽委員】寄宿舎を使った教育に実績を上げているところです。そこを見ますと、例えば、上級生が下級生に教えたりとか、チューター制度を取り入れたりとか、あるいは外部から講師ですね。生徒の学習の相談に乗ってくれるような人を投入するとか、そういうようなことをやっているようなので、是非そういうような制度もとっていただくといいのかなと思います。

なかなかこれも、大島だと、東京から行くというのは難しいかもしれない。そこら辺もインターネットとか活用しながらやったりとか、もちろん、大島の中にも、教員はできないけれども、学習相談に乗っている人はいると思います。そういう島中の人材を活用したりとかいうことで、積極的にドミトリの教育も考えてほしいなというふうに思います。

【事務局】今の話をそれぞれお伺いしておりますと、やっぱりICTを使った教育のようなのを一つ項立てした方がいいのかなと、今思いました。

あと、田島委員の方から頂きました、進路の実績がない分、外部の力を活用するなどといったことも、十分にPRする必要があるのではないかと、ということで、学校をPRしていくことについても、検討する必要があるのではないかと、というふうに感じました。ICTに関する部分と、学校のPRについても、今後引き続き検討すべき事項として入れた方がいいのではと感じましたが、いかがでしょうか。

【出張委員長】そうですね。場所がないですよ。

【事務局】ここには場所がないので、項目として。

【出張委員長】起こしていくということ。

【事務局】 はい。

【出張委員長】 ICTだと10でもいいかなと思いましたがけれども、1個起こしますか。

【事務局】 いや、10の中に入れるという手もあると思います。

【出張委員長】 入れるという形で。文言を入れてほしいんですよ。「ICT環境の整備」と。

【事務局】 わかりました。

【出張委員長】 それから、PRはどこに入れるかですね。入選のところでもいいかなと思ったのですが。PRだけで起こすのも、11項目になるから、どこかに入れておいていただけると。そういう形でどうですか。1個起こしますか。

【事務局】 入学者のところ、入学者選抜。

【出張委員長】 入学者辺りに入れてもらうことがいいのではないのでしょうか。

いいですかね。

【丹羽委員】 あと、3番目の国際的な視点に立った教育というところで、例えば、留学生をもっと多く入学するとか、そういうようなこと。寄宿舎でもそういう英語教育などにも役に立つと思いますし。

【出張委員長】 留学生の受入れ。今もやっていますけれども、それも入れるのがいいのではないかと。

【江藤委員】 大島海洋国際高校版TEEPとうたっていますけれども、大島国際高校版ということは、この特色の先ほどから出たドミトリまでを含めて、TEEPの設置を考えるという、そういうことまで検討しているんですか。

【事務局】 よろしいですか。TEEPそのものを入れようとすると、島なので、なかなか難しいので、島版TEEPと言った方がいいのかもしれないんですけれども、TEEPそのものだと多分難しいです。したがって、島版TEEPというのをしっかり考えて、どういうやり方ができるかというのを検討していかなければいけないという意味で、こう記載しています。

【江藤委員】 私が今言ったのは、結局、そういう環境をつくるということになったら、この特色というのは、さっきあったドミトリがある、寄宿舎があると。その中まで含めて、その環境をつくっていくんだという発想があるのかということなんです。

【事務局】 議論の中では、例えばJETの活用として、学校にいるJETと、寄宿舎にいるJETとかいうのを考えるということも、案としては出ています。費用の面もあつたりしま



すので、検討を進める中においては、そういうことも考えているということでございます。

【出張委員長】今JETは何人いますか。

【事務局】一人です。

【出張委員長】一人ね。

どうぞ。

【山寺委員】今、事務局の方から話がありましたけれども、JETの方が複数配置になって、当然のように学校の方にはJETもいますけれども、それを宿舎を含めてということになれば、その勤務時間とかの関係もあるから大幅にずらして、夕方からJETがドミトリにいる、というようなものが、もし実現するのであれば、とてもいいことかなとは思っていますが。

【出張委員長】そういうことも検討していくと、せっかく寮を持っている学校ですからね。あとは予算との関係が出てくる場所ですけれどもね。

【丹羽委員】2番の大島丸を活用した実習。今も実施しているのが沖ノ鳥島の実習とか、南鳥島にも確か行ったことがあると思うんですけれども、そういう実習は非常に特色がある、大島海洋でしかやっていない実習ですし、中学生などにも非常にアピールするところがあるので、是非安定的に行けるような体制を整えていただきたいなというふうに思います。

【出張委員長】是非体制を整えていきたいなと思います。

引き続き検討する場所なので、どんどん言っていただけると、全部残しておけますので。

【初宿副委員長】先ほど寄宿舎での教育という部分で、寄宿舎は第2の教育と銘打っているぐらい重要かつ特色のある取り組みなんですけれども、今、山寺校長先生の方で、もう少しこうやりたいなと、お金とか予算、そういう制約はあるにしても、これから先、充実させたい。今までできなかったけれども、充実させたいというふうにお考えになっていたことって何かございますか。

【山寺委員】今、寄宿舎の中で宅習をやっているというのは、皆さん御存じだと思うんですけれども、その宅習をより強固なものにしたい。つまり、生徒たちは宅習ホールを出て、自分の机に座ってはいるんですけれども、そこで騒いだりはしていないのですが、必ずしも勉強に取り組んでいるかという、そうでない場合があるので、つまり、本を読んでいたりと、そういうことがあるわけですね。本を読んでいるのが悪いというわけではないんですけれども、比較的ライトノベルであったりとかというのがありますが、そこはしっかりもう少し、いわゆる英数国といった教科の学習であったりとか、あとは資格の方は一定程度取り

組んでいる生徒はいますけれども、そういう学習に取り組めるような体制にしたいとは思っています。

【初宿副委員長】 そのためには何が必要というか。

【山寺委員】 そのためには、いわゆる方向性ですよ。資格取得をやるのか、大学受験に向かっているのかという方向性をしっかりと定めて、やれやれだとだめだと私は今でも思っているんですけれども、生徒が自ら取り組むような、そういった環境にしないと、なかなかそこはうまくいかないのではないかと思っています。

あとは、余裕があるならば、取り出しの補講みたいなものを、4棟ありますから、管理棟もあって、そこにちょっとした講義室のようなものがあるので、そこで講義ができるような体制がとれば、なおいいだろうとは思っています。授業ではなくてですね。

【出張委員長】 また、余りネット環境が整っていないから、例えばICTを活用した学習サポートサービスとかそういうのを使っているお子さんはいないんですか。個人的に。

【山寺委員】 それはちょっとわからないですね。

【出張委員長】 多分、全都から来るから学力的にもいろんな方がいらっしゃるでしょう。そういう面では、そういうのを使うとかね。実際に、ほかの都立高校でも使っている場合もあるから。そういうのでどこが弱いかなど分析しながらやっていくというのもありますよね。

【増淵委員】 さっきのICTと関係しますけれども、そういうドミトリで自習できるような、タブレットとか使いながら学習できる環境にしておくと、子供たちは目標を持ってドミトリに帰ってからも学習できるでしょうし、弱いところをどのようにすればいいかというガイドもついていますから、そういったのは、この寄宿舍での第2の教育としては使えるなと思います。多分、それはさっきのICTと絡められると思うんですけれどもね。

ただ、いろんなところにICTをちりばめられると思うんです。

【出張委員長】 ICT環境ができると、反転学習もできるものね。寮でやっておいて、授業はそこから始めるよとかやってあげることもできるから。やはりICT環境ですね。一番は。なかなか島だから、不便があって、大変だと思いますけれども。

【山寺委員】 そのICT環境が一定程度整うことによって、離島の壁が少し縮まるので、ハンデがなくなるので、ありがたいですね。

【出張委員長】 いろいろなことができますからね、今は。

ほかいかがですか。

【事務局】 よろしいでしょうか。事務局からですけれども、今の寄宿舍の話で、学校さんと話している中においては、現に授業を持っている時間講師を想定しているんだというふうに聞いておりますけれども、例えば、校内寺子屋に準じたようなやり方を、要するに、人を使って実際に自習の時間を指導する。

あとほかにも、これはジャストアイデアですけれども、大島高校もありますし、近くに中学校、小学校もございますので、その時間講師の方も行けるかもしれませんし、そういった島内の力を集めて、海洋国際の夜の時間に、そのかわり海洋国際の生徒たちもいろいろな場面で、小中学生に貢献をすとかということがあれば、学習がより相乗的に学習効果が上がっていくのではないかなというようなこともあろうかと思しますので、そういうことも考えていければなというふうに思います。

【初宿副委員長】 今まさに事務局のお話があったように、島民からしたときに、やはりここで言うと、（９）地域振興、島嶼振興、ここへの期待は大きいですね。特に生徒の８割ぐらいが島外からという中で、いかに大島という町にとって、どう振興等に生かしていけるかという期待は大きいと思うんですけれども、これまでの取組とともに、これから何かできるかという視点で、少し山寺先生の御意見を頂ければと思いますが、いかがでしょう。

【山寺委員】 具体的に何かというのは、正直今ないんですけれども、ただ、地域への貢献というのはとても重要であり、島の外からの生徒が８割以上いるというのは、そこだけで完結すると、結局島の中で孤立してしまうんですね。浮いた状態になってしまうので、今現在はそのようにはなっていませんので、いいんですけれども、何らかの地域貢献とか、大島町との協力というのは必要だと思っています。

その中で今現在、よく大島町の人からの声を聞くのは、カメラアマゾンなんですけれども、大島町のマラソン大会に、本校の１年生、２年生が全員エントリーすると。そういうことをやると、パンフレットに10代の部とかいうと、うちの生徒の名前がずらずらと出てくるので、こんなにエントリーしているんだというのは、そのパンフレット見る人はみんなわかりますし、女子の部も含めて、女子は５キロ、男子は10キロですけれども、そういう意味では、海洋国際の生徒がこれにエントリーしてくれて、本当にありがたいという声はよく聞きますね。

【初宿副委員長】 ありがとうございます。

【出張委員長】 いろいろな形で、島に貢献をしていただくといいかなと思いますけれども。

こないだの卒業式でも、2人が島に残る。就職するっていったら、大島の人たちが本当に喜んで、「こうやって残ってくれているんです」ということで、みんなには「第2のふるさとなんで、必ずまた戻っておいでよ」などと言って、本当に多くの方が卒業式に参列していただきましたよね。だから、本当に愛されているんだなと思いました。

【山寺委員】ありがとうございます。補足しますと、卒業生は78名ですが、そのうち大島出身者ではない、東京出身者が、ドミトリに3年間生活して、そのまま大島で就職するというのが2人。

【出張委員長】町長さんが喜んでいましたよね。そういういいところを残しながら、新しく変えられるところは大きく変えていけるといいかなと思うんですけれども。

大体、よろしいですかね。御意見が出たところを、事務局で加えて、まとめるようにしてもらえればなと思いますので、よろしく願いいたします。

そうしますと、次第の3番目「大島海洋国際高等学校在り方検討委員会報告書（骨子）案」について。これは資料の3ですかね。これに基づいて、事務局の方から説明をお願いします。

【事務局】それでは、資料3を御覧ください。冒頭、委員長からの説明にもございましたとおり、本日が実質的に最後の委員会での御議論と考えております。本日の委員会終了後、事務局にて報告書にまとめていくに当たりまして、報告書の（骨子）案を作成いたしましたので、御説明させていただきます。

まず、左上ですけれども、第1に学校の現状について、過去の改変の経緯も含めて記載をしたいと考えております。この中におきまして、生徒、保護者の皆様の興味、関心などや、教育の内容などについて、これまで検討委員会にて御報告させていただきました状況等を記載してまいります。

この時点で、もう既に少し修正をしているところもございまして、資料3の第1の1で、「大島海洋国際高等学校の学科改変における背景と経緯」とありますけれども、あたかも、今回の検討委員会の議論がここにいきなり出てくるように記載が出ておりますので、ここについては、現時点でタイトルを修正しようと考えています。過去の経緯だということがわかるような表現にしたいと思っております。

次に、第2といたしまして、学校を取り巻く現状について、第2の1で海洋基本法の策定や、海洋基本計画における海洋人材の育成等の国家的要請の増大の状況について記載してま

います。

第2の2におきまして、都民の期待からくる、都の施策における島しょ振興策の状況等について、記載をしてみたいと思います。

第2の3におきまして、学習指導要領の改訂の趣旨や、現在出ております改訂案の内容などを記載してみたいと思います。

その下の第3のところですが、第1の学校の現状に対しまして、第2の学校を取り巻く様々な状況を受けまして、第3として国際的に活躍できる海洋人材の育成に向けた考え方であるとか、必要性であるとか、育成すべき海洋人材像などを記載してみたいと思います。

最後に第4といたしまして、これまで御議論いただきました改革に向けた今後の方向性について、教育理念と教育目標、基本的な枠組みの方向性、育成すべき海洋人材像の具体的キャリア、また教育の方向性など、本日、本検討委員会後に引き続き検討すべき事項という構成で記載させていただきたいと思います。

また、本日の御議論を踏まえまして、必要に応じて記載を増やしてみたいと思いますので、委員の皆様にご確認のほど、よろしくお願ひしたいと思います。

これら報告すべき内容の後に、関連資料や、検討委員会での各会の検討の状況及び資料等について、設置要綱も含めて掲載させていただきます。

また、委員名簿についても掲載をさせていただきますので、御了承をお願いしたいと思います。

本日は、報告書の骨子案、流れなどについて、御確認を頂きまして、この場で、確定をさせていただければと思います。その後、我々の方にて、構成に基づきまして、早急に報告書案を作成いたします。報告書案はできるだけ来週の早い段階で委員の皆様へ送付いたします。庁内につきましては、紙にてもお渡ししたいと思います。その後、内容を御確認、赤字にて修正後に、事務局へお戻しいただきたいと思いますと考えております。各委員の皆様のご意見を反映した後、第5回の検討委員会におきまして、委員の皆様のご意見を基に、どのようにまとめたいかについて、事務局から説明をし、その場で御了解を頂きたいと思っております。

そのため、第5回については、議論の場ということではなくて、御確認の場とさせていただきたいと考えております。

詳細については、また別途御案内をさせていただきます。短い期間になりますが、報告書

の取りまとめに御協力をお願いしたいと思います。

説明は以上でございます。

【出張委員長】ただいま事務局から報告書案の骨子案を示してもらいました。その後の流れも、来週中までに作って皆さんのところにお送りするということですが、まず骨子の、報告書の項立てですね。これでいいかどうか。あるいはここをこうした方がいいのではないかとありましたら、御示唆いただけるとありがたいのですが、いかがでしょうか。

今まで、やってきたことが入ってくるわけですね。きっと。

【事務局】はい。

【出張委員長】ですから、流れ的にこれでよければ、つくってもらいまして、実際のものを見てもらって、赤を入れてもらえるとありがたいということでございます。

第1の1は少し表題を変えるのですね。

【事務局】はい。

【初宿副委員長】少し細かい表現上の問題かもしれませんが、第4の4のところ、引き続き検討すべき事項、これはこれでわかるのですが、この報告が外に出ていったときに、どこの誰が検討するのかという、少し疑問が生じるところです。ここはどこの誰が検討するのかということをはっきりさせた記述の方がいいかと思いますが、その辺りは事務局としていかがですか。

【事務局】現在は外部の有識者を含めました検討委員会という形で検討を進めているんですけども、この後の検討につきましては、こういう検討委員会とした場でやるのがいいのか、それとも教育委員会と学校とでやるのがいいのかということについてもまだ決まっておりません。事務局としては後者の方だと思っておりますが、要するに、理念や目標などは、この検討委員会の場を踏まえまして、最終的には教育委員会で決定をいたしまして、その後の中身については、学校を中心に検討していくというのがいいのではないかというふうに、職の立場としては思いますけれども、そこも含めて検討した方がいいのかなというふうにも思います。

【出張委員長】どうぞ。

【初宿副委員長】そうであるならば、「実現に向けて取り組むべき事項」とかというふうにしたほうがいいかなと思います。

【事務局】わかりました。

【出張委員長】そうですね。「実現に向けて取り組むべき事項」と書いた方がいいのではないかと。

ほかにどうですか。

では、これで作ってもらって、読んでみると、タイトルをこうした方がいいとか、また変わることもあるかもしれませんので、来週早々には送付するというので。今日は木曜日ですけれども、事務局、よろしくお願いします。

【事務局】頑張ります。

【出張委員長】事務局の方で作成をしますの、来週見ていただければと思います。

それでは、最後に次第の議事の（４）その他ですね。その他、委員の皆様から何かございますか。よろしいですか。

【田島委員】これからいろいろと検討したりしなくてはいけないこともあると思うのですが、保護者というか親の方からしますと、こんなことができる、あんなことができるということで実際入りました。でも、実際にはできなかったということだけは極力ないようにしていただきたいなど。そういう気持ちで親も子供も入ったのに、実際できなかったではないかということだけはちょっと。無理なら無理ということで、きちんと伝えられるような環境で行っていただければと思いますので、それも踏まえてよろしくお願いします。

【出張委員長】ありがとうございます。

やれることをしっかりと決めて、都民の皆様、中学生に示してあげて、安心して来られるようにしていきましょう。

ほかにいかがですか。よろしいですか。

では、これで今日の議題は終わりですので、３のその他、今後についての事務連絡をお願いしたいと思います。

【事務局】次回、第５回検討委員会につきましては、既に御調整させていただきましたとおり、３月20日火曜日午前10時から11時までとさせていただきます。場所等については、また追って御連絡いたします。

次回の検討委員会におきましては、先ほど御説明したとおりですけれども、委員の皆様の御意見や御議論をどのように取りまとめたのかにつきまして、報告をさせていただきます。その報告に対して御了承を頂きたいと思っておりますので、短い中での調整になりますが、重ねてよろしくお願い申し上げます。

また、今後の検討に向けた御期待などについても、次回の検討委員会では委員の皆様から頂戴できればと考えております。

なお、報告書の取りまとめには、多少お時間を要しますので、事務局の方で、来週早々にはなるべく取りまとめて報告書を送付させていただきたいと思っております。御確認を頂く際に、スケジュールや依頼事項、修正や御提出の方法等につきまして、詳細を御案内させていただきます。

繰り返しになりますが、期間が短い中でのお願いとなりますことを、おわび申し上げますとともに、委員の皆様の御協力を重ねてお願い申し上げます。

事務連絡は以上でございます。

【出張委員長】事務局から今説明あったのですが、非常にタイトな日程になっておりますので、大変恐縮ですが、御協力のほど、よろしく願いいたします。

次回は3月20日ですね。第5回検討委員会、これが最終回になりますが、そのときには、皆様から頂いた意見に基づいて訂正したものを、お示しして確認をしていただければと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、第4回の検討委員会はこれで終了させていただきます。御協力どうもありがとうございました。